

# ART project

## GEIBUN オープンエアミュージアム in 環水公園

場所の特性を活かす工夫

富山大学芸術文化学部准教授 渡邊 雅志



「HAPPINESS BIRD PROJECT」(2010～)

### 趣旨

富山県と富山大学は、「富山県と国立大学法人富山大学との連携に関する協定書」により連携協力を行っています。その一環として、富山大学芸術文化学部の学生および教員の作品を、富山県の代表的な公園である富岩運河環水公園に展示する「GEIBUNオープンエアミュージアム in 環水公園」を2010年より開催しています。富岩運河環水公園を利用される多くの市民の方々に、豊かな緑あふれる公園の中で芸術文化学部の作品に触れる機会を提供し、公共空間に現れた様々な作品を通じて、日常にある驚きや楽しさ、そして喜びを実体感していただきたいと考えています。この取り組みが、芸術文化が社会や環境そして人々に豊かな創造性を伝え、日常生活に潤いを与える力があることに気がつき、今後の富山の新しい魅力として繋がっていくことを願っています。

### 場所の特性を活かす工夫

「GEIBUNオープンエアミュージアム in 環水公園」は、公共空間における屋外での展覧会という特別な企画です。近年様々な地域でも、その地域特有の立地や特徴を活かす作品が展示・創作される“芸術祭”が開催されています。作品発表と同時に地域に関心を寄せてもらう工夫も垣間見え、これが芸術祭が地域活性化に繋がる大きな要因とも言えます。

市民の多くが利用する環水公園は富岩運河を中心として整備され、樹木、芝、水など自然が豊かな公園です。「GEIBUNオープンエアミュージアム in 環水公園」においても、この自然の中で過ごす豊かな季節感を大切に、様々な作品やワークショップを企画しています。これまで発表した作品を例に、どのように環境を捉え、コンセプトを生み出し、作品や展示に工夫が盛り込まれているのかを、作品の準備の様子と共に紹介します。

### 「HAPPINESS BIRD PROJECT」

公園に既に在るものにアートの要素を採り入れることを目指した作品。当たり前存在する鳥でさえ日常では気に留めないと見えない(意識しない)ことがあります。公園内を地図を片手に“見つけるといいことがある鳥”を散策しながら発見する鑑賞方法です。



バードカービングした木製(ヒノキ)の“鳥”がキャンパスになる。

### 「夢りんごプロジェクト」

公園には様々な樹木があります。木に生るものと言えば花や実です。通常は願い事を書いてぶら下げる絵馬を、ここではりんごのかたちにする事で、木にぶら下げる必然が生まれます。さらに書いた願い事は“実り”に繋がり、願いが“叶う”ことと“実り”が結びつきます。



りんごの絵馬の制作。素材のヒバ材は、りんごの質感によく似ている。



上「夢りんごプロジェクト」(2011～) / 下「金魚と錦鯉」(2011～)

### 「金魚と錦鯉」

川に魚がいるかどうか、じっと水面を見つめた経験はありませんか。ユラッと動くものが魚に見えることがあります。通常は魚のいない公園の水盤に、金魚と錦鯉を放したように見える作品です。水面が風にゆられてさざ波が立つとあたかも泳いでいるように錯覚します。



石に金魚柄のペイントをする。水を張ったバケツに入れて確認。

### 「クモの巣プロジェクト」

公園内に巨大な“クモの巣”を公開制作する作品。公園を散策する人々が不思議な“クモの巣”に集まってきます。子どもたちがクモの巣に入り込むと、まるで捕まってしまった昆虫のようです。作品は鑑賞から体験する作品に変わり、ついには鑑賞者が作品の一部になります。



キャンパス内で行った試作の様子。紐の素材や留め方などを検討する。



上「クモの巣プロジェクト」(2012～) / 下「葉っぱでぬいぐるみ」(2014)

### 「葉っぱでぬいぐるみ」

公園の樹木が紅葉し、落ち葉が芝の上に広がる風景に気がつくことが全ての始まり。その場で調達できる素材を材料にしたものづくりワークショップ。参加者は透明な袋に葉っぱを集めてぬいぐるみを作ります。紅葉した様々な色の葉っぱがぬいぐるみの柄になります。



試作のためにキャンパス内で落ち葉を集めている様子。

### 日常と非日常から生まれるもの

本展は2014年度で5回目の開催となりました。環水公園は四季が感じられる憩いの場です。その豊かな自然環境を活かしながら展覧会を開催し、芸術文化の可能性を伝えられるよう工夫しています。本展の様々な作品やワークショップを通して、普段の生活の中にも驚きや楽しさがあることを体験することで、これまで感じることでできなかった出来事にも気づくことができます。豊かな生活は豊かな心が伴わなければ感じることはできません。豊かな心を育むには好奇心と創造力が必要です。本展のように公園という日常の中で展示を行うことの意味は、日常と非日常の差を自ら認識し、日常にある既知との違和感に気がつくことにあります。芸術文化はわかりづらいと思われがちですが、ベースになっているのは一般的な日常生活です。そんな“みんなが知っていること”にあらためて驚きなおす素直な気持ちが、日常に潤いを与える力になると考えています。